キャリア教育研究委員会

一　テーマ

児童生徒一人ひとりが夢や希望をもち、自己実現を目指して自己の個性を理解し、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育てていくキャリア教育の在り方

二　テーマ設定の理由

学習指導要領では、特別活動を要として学校教育全体を通してキャリア教育を進めていくことが示されている。変化の激しい予測不可能な社会の中で子どもたちが将来自分の力で生活していくためには「社会的・職業的な自立に向けて必要な資質・能力」の育成が重要である。

本委員会では、各校でキャリア教育をどう教育課程に位置づけ、関連する諸活動をどのように体系化していくのかを、各校の実践事例をもとに共有し合うとともに、県内外のキャリア教育先進校を訪問することを通して、情報発信を行ってきた。令和２年から４年にかけては、新型コロナウイルス感染拡大により視察を中断していたが、昨年度は新型コロナウイルスの５類移行に伴い、伊那市の「キャリアフェス」の視察を行うことができた。今年度は以前のように県外の視察を通して、学校教育の中でキャリア教育をどのように位置づけていくか研究を進めたいと考えた。

三　研究の経過

５月　２日　第１回委員会･･･研究の方向の確認
５月２３日　第２回委員会･･･各校のキャリア教育の実践やキャリアパスポートの活用方法の情報共有
８月下旬　　･･･県外視察校との連絡調整及び委員への連絡
１０月　１日　第３回委員会･･･県外視察校についての情報共有
１１月２５日　第４回委員会･･･総委員会及び視察についての確認
１１月２８日　第５回委員会･･･県外視察（キッザニア東京・東京都立立川中等教育学校・附属小学校）

四　研究内容

１　キッザニア東京の視察から

キッザニア東京は、東京都江東区豊洲のアーバンドックららぽーと豊洲内にある施設で、国内には兵庫県西宮市にキッザニア甲子園、福岡県福岡市にキッザニア福岡がある。海外では、ジャカルタ・リスボン・ロンドンなどに展開。昨年度の学校団体の利用は１１００校７７０００名。学年別割合は、小学校高学年～中学校７７％、園児～小学校中学年２３％。昨年度の長野県内からの利用は６４校、上田市からは７校となっている。「楽しみながら、働くことの意味や社会の仕組みを理解するための場」がコンセプトである。

（１）キッザニアの特徴

①全てが子どもサイズの街

デパートや病院、車などふだんの街並みを子どもサイズの３分の２サイズに再現し、リアリティのある設定で、「自分が主役」の意識をもたせている。

②１００種類以上の仕事を体験

６０以上のパビリオンと、１００種類以上のアクティビティを体験できることで、知らなかった仕事の存在や社会に多くの仕事があることに気づくことができる。

③リアリティの実現

スポンサー企業の協力で、子どもたちにリアルな環境を提供している。

④キッザニア独自の経済

仕事をすると独自通貨（キッゾ）で給料をもらえ、それを街の中で使ったり、銀行で預金したりすることができる。

（２）キッザニアで学べること

①働くことの意味

「誰のために」「何のために」仕事をするのか考えながらアクティビティを体験し、仕事をする意義や目的に気づく。

②社会や経済の仕組み

街の設定の中で、仕事をしたりお金を使ったりする体験を通じ、社会や経済の仕組みを体験できる。

③達成感と自信

キッザニアで仕事をやりとげたという達成感が、大きな自信につながる。

④コミュニケーション能力

仕事には、人と人との関わりが不可欠。体験を通して、多くのコミュニケーションを体験する。

⑤異年齢交流

初対面、異年齢の子どもたちが一緒に体験することで、他者を気遣ったり助け合ったりすることの大切さに気づく。

⑥チームワーク

多くのアクティビティはチームで仕事を行い、それぞれの役割に分かれて一つの仕事をやり遂げる。

（３）英語の取組

英会話としての完成度を求めるのではなく、人とのコミュニケーション力を磨くことを目指している。英語での取組には以下の２つがあり。英語で体験した小学校５～６年生の約７割が「英語をもっと学びたいと思った」「英語のコミュニケーションが楽しかった」などのポジティブな意見をもつようになっている。

①E@K Activity

毎日５～７つのパビリオンが、最初から最後まで英語で進行するプログラムを実施している。ボディランゲージやジェスチャーを使った「わかりやすい英語表現」を重視しているので、英語に自信がない子どもでも安心して仕事を進めることができる。

②English Wednesday!

毎週水曜日は、E@K Activity を約半数のアトラクションで実施し、英語が飛び交うキッザニアの街を体験できるプログラムとなっている。学校で学んでいる英語を、より「実践」する場として活用ができる。

（４）キャリア教育への取組

キッザニアではキャリア教育実践プログラムを準備し、このプログラムを活用することで、１日だけの体験学習にとどまらない体系的なキャリア教育につながるようにしている。予約した学校団体には、体験学習と連動した事前・事後学習用教材が送られ、これを活用することで、子どもたちにとって漠然としていた「働く」イメージがより鮮明になるようになっている。また、中学校団体に対してはオプション教材として仕事/学問カタログなども用意されており、より一層働くことへのイメージの具体化が図られている。

２　東京都立川国際中等教育学校・附属小学校の視察から

東京都立川国際中等教育学校は、平成２０年に開校した。令和４年４月に附属小学校が開校して、公立では全国初となる小中高一貫校となった。教育目標を「国際社会に貢献できるリーダーとなるために必要な学業を修め、人格を陶冶する」とし、地球規模で問題を考え、当事者意識をもって自分ができることから行動することができる人になることを目指す教育活動を行っている。この明確な教育目標に対する保護者の関心は高く、令和４年度の附属小開校時の応募倍率は３１倍に上り、先日行われた令和７年度入試でも２４倍となっている。

学校概要や教育活動の詳細は学校ホームページに掲載されているので、今回はこのような全国初の小中高一貫校を視察させていただいたなかで印象的だったことをいくつか紹介させていただく。

（１）将来像が明確な小中高一貫教育のグランドデザイン

小学校卒業時における目指すべき児童像や高校卒業時の生徒像のみならず、卒業２０年後の生徒の姿がグランドデザインの最初に記載されている。例えば、小学校卒業時の目指すべき児童像は「基礎的・基本的な言語能力や論理的思考力、探究的に学ぶ力を身に付け、多様な人々と協働する人になるとともに、身に付けた資質・能力を活用し、世界を視野に入れ、社会の平和と発展に寄与しようと、地域社会の活動に参画する人」であり、卒業２０年後の生徒の姿は、「高い言語能力を活用して、世界の様々な人々と協働するとともに、論理的な思考力を用いて、諸問題を解決し、様々な分野で活躍する人材」と、目指すべき姿を極めて明確にし、その姿を具現化するべく教育活動を展開している。

（２）「国際社会に貢献できるリーダーとなるため」の様々な取り組み

①文科省の教育課程特例校の指定（附属小）

小学校１年から「英語科」を設置し、週４時間の授業を外国人指導者のもと実施している。教科書は東京都教育委員会がＮＨＫ基礎英語の講師や大学教授などに依頼し、本校専用のものを作成し、使用している。

②東京教育委員会の海外学校間交流推進校の指定（附属小）

オーストラリア・ベトナム・スリランカ・台湾の小学校と姉妹校締結を行い、６年生で現地訪問を行う。また、６年生の時に飛行機で現地に行くための準備として、４年生の「東京を知る学習」で「東京の離島に行く」という内容を設定してそこで飛行機に乗る体験をさせたり、低学年から「１日英語体験の日」を設定したりするなど、「日本を出る」ということへのハードルを小学生段階から下げるようにしている。

③海外帰国者・在京外国人の受け入れ

小中高とも各クラス約２０％が海外帰国者や在京外国人である。このような環境の中で学校生活を送ることで、地球規模で物事を考えることへの第一歩となっている。

④多言語教育「マルチリンガルスタディ」

小学校段階では月１～２時間程度、東京外語大や中央大等と連携して韓国語・中国語・ドイツ語・スペイン語・フランス語・アラビア語の６言語を学習している。中高ではより知りたい言語を第二外国語として選択して授業で深めている。

（３）思考力・判断力・表現力を高める探究プログラム「立国 LEADER プログラム」

１２年間を３つのフェーズに分け、体験から「なぜ」を発見することから始まって、国内外の課題を探究することにつなげ、最終的に進路実現に活用していく。視察当日にも、高校２年生がこれまでの探究活

動を体育館で発表し討論を行ったり、高校１年が生成ＡＩを企業の方に教えていただいたり、中学３年生が駅前商業施設の活性化を話し合い企業側に提出の準備をしたりしていた。また、校内には自由に学習に使えるスペースがあるが、四角形のテーブルは個人で使い、円形は仲間とディスカッションするために使うように分けられ、個と集団それぞれの時間を意識できるようにされている。

（４）小中高のつながりが生む様々な効果

平成２０年に開校した中等教育学校と令和４年に開校した附属小学校は用地の関係で道を隔てて建てられている。そこを「空中歩廊」という通路でつなぎ、天候や交通状況に左右されずいつでも自由に行き来できるようになっている。これにより、全ての施設を小学生から高校生までが使うことができる。したがって図書館は、小学生から高校生に向けての本が置かれており、小学生が高校生向けの本を読む姿も見られるとのこと。また、空中回廊には、探究学習の祭典「クエストカップ」で受賞した高校３年生の「どうしたら救急車の適正利用はすすむのか？」をはじめとした学習の成果物が貼られており小中学生も見ることができるようになっている。さらに当日体育館で行われていた高校生の探究学習の発表会に時には中学生が見学に訪れることもあるとのことで、ふだんは小中学生に読み聞かせをしたりけん玉や鬼ごっこで遊んだりするお兄さんお姉さんが活躍する様子が日常的に目に入るようになっており、憧れを身近にする環境が作り上げられている。

３　研修の感想（委員より）

（１）キッザニア東京

・対象年齢が３歳～１５歳ということを初めて知りました。なんとなく、小学生対象という思い込みをもっていたので、施設の方からのそのような説明を聞いて、「中学生が体験する」という眼で施設を見学させていただきました。これまでの中学生の利用方法としては、職場体験学習の事前学習、またはその本番としての利用が多いとのことでした。長野県からの利用となると、利用料等の面が解決されたとしても、距離の問題があるため現時点では気軽に利用することは難しい面があるかと思いますが、「地元・地域を考える」という側面や「AI 時代に『働く』」という側面からのキャリア教育で活用できる可能性があると感じました。

・私にとって初めてのキッザニアでしたが、子どもの目線に合わせて作られているという設計に驚かされました。町のサイズや、夜の雰囲気なども、子どもを主役にして、真剣さを引き出すためには大切なことだなと実際の様子をみて感じました。キャリア教育をしていく中で、「子どもがイメー

ジできる仕事が限られている」ことに、難しさを感じます。様々な仕事の内容を知り、働くことに対する知識を増やしていくことは、将来の可能性を広げるうえで重要だと感じます。そのため、実際に多種多様な仕事の内容を知り、経験できるキッザニアでの学習は有効だと感じました。来ている学校は小学校が多いようですが、中学校でも職場体験の事前学習などで、働くことのイメージを広げるには良いと感じます。

・先月修学旅行でキッザニアに行き、実際に体験した子ども達も見ているので、今回教えていただいたコンセプトや目指す子どもの姿と合わせて、感じたことを書かせていただきます。まず、キッザニアで体験できる仕事が１００を超えるという点についてです。警察署、歯科医院、ハンバーガーショップなどの子ども達の身近にあり、仕事内容をイメージしやすい仕事に加え、地下鉄、科学研究所、裁判所など聞いたことはあれど、身近にはなく、地域に協力いただく職業体験でも出合えないような仕事も知り、体験できるということは子どもの職業選択の幅を広げてくれると感じました。また、英語を使った体験を行っているという点にも魅力を感じました。毎週水曜日には、「EnglishWednesday」と題し、約半数のアクティビティで英語を用いたコミュニケーションを行っているそうです。実際に私が修学旅行で訪れた日は、「EnglishWednesday」の日で、事前学習で子ども達にその旨を伝えると、消極的な反応の児童が多かったものの、実際に行くと、自然に英語を使ったコミュニケーションを行われるような雰囲気や、スタッフの方の働きかけがあることで、臆することなく学習した英語を使いながら、初めて会う人とも協力して仕事を行っている姿が見られました。英語の授業に学んだことを実際に使い、「相手に伝わった」「相手の言っていることが聞き取れた」という体験をお仕事を通して得られるのは、とても効果的だと感じました。そして、仕事体験に留まらず、事前・事後学習も充実させるサポートを行ってくれる点も魅力に感じました。事前学習では、「働くことについて考える」ワークシートがあり、体験の後にも同じワークに取り組み、自己の変容や視野の広がりを自覚できるものでした。他にオプション教材もあり、自分の「好み」や、自分と周囲や社会との関わり方に対するタイプ診断をし、自分と同じタイプの人がどんな仕事についているのかが分かるものなど、非常に充実していました。こうした資料などを活用して学校で事前・事後学習をおこなうことで、単なる体験で終わらせるのではなく、以後のキャリア教育に繋げ、深めることができると感じました。

（２）東京都立立川国際中等教育学校・附属小学校

・ハード面とソフト面のバランス、ということについてたくさん学ばせていただきました。ハード面、特に校舎を中心とした建物関係は、気軽に変更することは難しいですが、「あるものをどう利用していくか」ということについての考え方が素晴らしいと思いました。現在の上田市・上小地域にもたくさんの可能性があるということを、副校長先生のお話からたくさん気づかせていただいたように思います。学校図書館の展開の仕方も、現在の上田市・上小地域で取り入れられるものがたくさんあると、司書教諭の立場としても感じました。私自身は、県内の中高一貫校を拝見したことがないので、今回学んだことをもとに、県内の中高一貫校も拝見してみたいと思いました。

・図書館を中心とした施設の作り、学びの中心に図書館があるということが印象的でした。同じ本でも、複数の言語での翻訳があり、外国語教育に力を入れていることが伺えました。「外国へ行く人と行かない人の差が開いてきている。将来の可能性、選択肢を狭めないでほしい」という先生方の想いもキャリア教育を進めるうえで大切だと感じました。また、小学生低学年と高校生までが同じ図書館にいるという環境もすてきでした。好きなこと、興味あることを探究するのに年齢は関係ないのだなと改めて思いました。渡り廊下に掲示された、学習カードや発表資料からも生徒主体の探究活動と学びの蓄積を読み取ることができました。

・小学校から高校までの１２年間で一貫したプログラムがあることや、探究に向かわせる環境が充実している様子を見せていただきました。校舎にかかわって、小学校～高校までが空中歩廊で繋がった校舎であり、外に出ずに行き来することができるようになっていました。たとえ近くにあっても

校舎が別だと実現しないことが多々あり、同じ校舎だからこそ幅広い異年齢同士の交流が豊かに築かれていると感じました。また、円いテーブルとイスが置かれている対話エリアや、プレゼンテーションを行うことができる部屋、和室、小学校のうちから多言語に自然と興味を示せるような工夫がなされた図書館、理科室の近くにすぐに調べることができる図鑑や文献が備えられた教室配置等々･･･校舎のつくりや配置などにも、子どもが自然と探究に向かえる工夫がなされていました。生活・学習にかかわっては、キャリア教育がごく自然になされている印象がありました。先生や多国籍の子どもとの関わりで世界に目を向け、体験を通して実感を伴った学びを積み上げているのだなと感じました。ただ教科書を（で）学習するのではなく、基礎的な学びに加え、自ら興味関心をもったことに関して探究していくことで視野が広がり、キャリア教育が充実していくような気がしました。私たちの学校でもできる環境作りや働きかけを考えさせられるよい機会となりました。

五　研究のまとめと課題

今年度は、コロナ以前のように県外視察を行うことができ、その実践から学ぶという貴重な機会をいただくことができた。

また、今年度のテーマに向けては、キャリア教育的な視点をもった各教科や各学年の授業実践の情報を共有することができた。今年度の研究をとおして、キャリア教育と銘打って何か活動を仕組むのではなく、これまでの教育活動をキャリア教育の視点から見つめ直し、児童生徒の社会的自立に向けて発達段階に合わせてより効果的に教育活動を行っていくことの大切さに気づくことができた。

来年度に向けては、今年度の活動をもとに、以下の２点を特に意識して行っていきたい。

（1）これまで以上に、各学年・各教科でキャリア教育的な視点をもった授業づくりを目指していく。

（2）広い地域からキャリア教育の視点を学び、自校に持ち帰り、各校の環境、各学年の発達段階、実態に合った教科の授業に活かした実践をするとともに、各委員が学んだことを様々な機会において発信することを意識し、キャリア教育委員会での学びを上小地区全体に還元できるようにしていく。